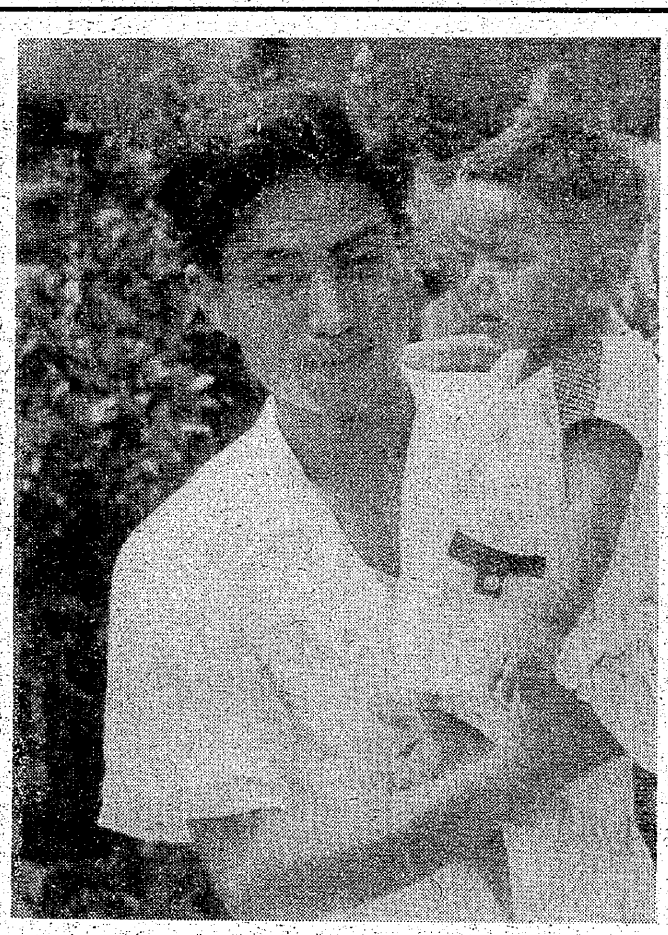
原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第九十九号



写真上は、長男の進さん（向つて右端）がお正月に帰つてきたとき撮つたもの。その隣りがひとり娘の栄子さんで、一番左がマツエさん。まんなかはいうまでもなく、次男の実君。左の写真は、まだ赤ん坊だつたころの進さんを抱く学さん。ご安心ください、子どもたちはこんなにも大きくなりました。

原告団レポート

遺族――中島マツエさん

四季に花は咲けど……

荷物背負って生きてきた十三年間

今、支えてくれる子どもたち

仲よし娘弟

三池の遺族の一人、中島マツエさん。昭和二年三月二十日生れだから、今年ちょうど五十歳。遺族仲間といっしょに、誘致工場の一つ――三池縫製工場の縫製工程で働いている。

住居は、大牟田市野添社宅十五棟。屋根の低い炭鉱長屋の一隅にある。

あの三川鉱炭じん大爆発で、かけがえのない夫をなくした悲しみに泣く身にこそ変りはなけれ、それでもマツエさんは仲のよい子どもたちに囲まれていてしあわせだ。

亡夫の名は学さん。昭和三年三月八日の生れだから、としは妻のマツエさんより一つだけ若かったわけである。

結婚は、昭和二十八年三月二十七日。二人はイトコ同志だった。

「恋愛結婚だったんでしょう」と問うのに、マツエさんは「いいえ、平凡な見合い結婚でした」、といってくすりと笑った。が、ひとり娘の栄子さんにきけば、小さな声でこう答えた――「多聞……ですね」。

ところで子どもは、まず長男の進さんが昭和三十年八月七日生れで、今二十二歳。神戸の、とある肉屋で調理士として働いている。中学を卒業すると、進さんは高校進学をあきらめ、今のお店にその見習として住み込んでいった。七年前、十五歳のときのこと。今では、勉励の甲斐あって立派に腕を磨きあげている。

長女（といってもひとり娘）の栄子さんは、三十四年八月二十一日生れで今十七歳。市内の某私立高校の三年生。二重まぶたで、大きく見開かれた両の瞳はあくまでも涼しく、心の美しさをありありと物語っている。ヘミングウエイの著作を次つぎに読みあさってきているという、文学少女。

次男は実君という。三十七年九月二十一日生れだから、今年十五歳。中学二年生である。小柄ながらだで、幼い頃よく病気しては母親マツエさんをハラハラさせたらしいが、今はいつも笑顔を絶やさず明るい。

「どう。お父さんもいないことだから、兄弟ゲンカはよくやったろう」と聞くと、実君はニコニコ顔のまま首をかしげながら、小さな声でいった――「いや、いっぺんもそのおぼえはない」。

そういえばどうだ、はじめてたずねたこの家のなかの明るさ。

美しい家庭

たずねていった日のこと、ちょうど居あわせた二人の子どもを前に、「こんなにも明るい人間に育ててもらって、ほんとにお母さんがありがたいと思うだろう」と聞くと、高校三年生だという栄子さんがはっきりと宣言した――「いや、ありがたいというより、私は母を心から尊敬しています」。

マツエさんは、接するかぎり口かずも少い方で、決して目立つ存在の人ではない。それだけに内面の深いところに、いっそう優れた母親としての人間が秘められているに相違ない。つくづくそう思いながら、かたわらのマツエさんの方をふり返りたずねた。

「母親として、よっぽど偉いんですね。子どもたちからこんなに尊敬されて、あなたはしあわせですよ」。

マツエさんは、答えていった。

「いえいえ、尊敬されるような母親ではないですけれども、考えて見ますと、子どもたちも私のことを思っていてくれるのでしょうこと十年間ほど、ほとんどごはんを炊いたことはありません」

「子どもさんたちは、まだ幼なかったはずでは……」

「ええ、一番うえの男の子が、中学生の頃からごはんはきちんと炊いてくれましたから。もちろん朝ごはんだけは、私が炊いてきていますけど。

それに、これもこの十年間ほど自分の寝床をしいたこともなければ、雨戸を開めることもなく過ごしてまいりました。ごはん炊くのが一番うえの男の子なら、寝床をしいてくれるのが一番下の子で、雨戸を開めるのがこの娘というように、いつとは知れず役目がきまってきたのですね」

思いも寄らぬ逆境につき落とされたことが、あるいはこんなにも美しい家庭をつくりあげたのでもあろうか。

句に託して

神戸の肉屋で、調理士として働いている長男の進さんもことのほか母親思いだ。

正月はといえば、父親学さんのお墓まいりをかねて必ず帰ってくるが、親兄弟はもちろんのこと、身うちの人びとへの手土産も欠がしたことがないという。

母親のマツエさんには、これまで十万円から十五万円ほどお金をくれたものだが、今年の正月など五十万円も差し出しながら、「二十万円くらいは、お母さんが自由に使っていいよ。また何かことがあるときは、みんな使ってしまってかまわないのだから」、といってくれたのにはおどろいた。

「あんたが苦労してためたお金だもん。私が勝手気ままに使えるもんね」

マツエさんは、よろこびにはずむ胸を押さえながら、進さんの目の前ですぐ、それも進さん自身の名前で定期預金にしておいてやった。

亡夫学さんの遺骨は、今大牟田市船津町の妙立寺の納骨堂に静かに安置されているが、三人の子どもたちともども今年の正月お墓まいりをしたときのことである、マツエさんの心のなかにどこからともなく浮んできたというのが、次の一句だった。

×

亡き夫ひと目見せたや子供達

子ども心に

思えばマツエさんが、昭和三十八年十一月九日のあの三川鉱大爆発で夫・学さんの命を奪われたのは結婚後ちょうど十年目のことだった。学さんが三十五歳、マツエさんが三十六歳のときのことで、三人の子どもも、やっと小学二年（八つ）になったばかりの進さんをかしらに、四つの栄子さんと生後一年二カ月という、まだほんの赤ちゃんに過ぎなかった実君といったありさまだった。

夫と、それに仲間とともに闘ったあの三池大闘争以後、打ち続く無法極まる合理化攻撃と資本の差別支配のもとで、強いられた苦しい暮らしにこそ耐えなければならなかったものの、あれほど妻思い、子ども思いだった学さんさえ生きていてくれたら、一家の前には明らかに働く者のしあわせに通ずる道が開かれていたし、すべてはこれからというときのことだったのである。

だから、学さんの犠牲は後に残されたこの母子のうえに痛打を加えた。思いも寄らぬことに、恐ろしい生きざまがすっぽりと一家を包んでいった。

いや応なしに、マツエさんは三池縫製工場へ。まだ赤ん坊だった実君をおんぶしてはバスでの出勤で、同誘致工場脇に特設された保育園へその実君をあずけては、くる日もくる日もマツエさんはミシンをあやつり続けた。

さいわい長男の進さんは小学二年、ひとり娘の栄子さんが家の近くの某幼稚園に通っていたから、留守はその二人に託することができたものの、まわりの友だちがそれぞれ父親といっしょに遊びに出かける連休のときなどさすがにたまらなかったものと見え、「お母さん、お父さんをもらわんね」としつようにくり返してはマツエさんを泣かせた進さんだった。

庭に咲く花

あの日から早くも十四年。三十六歳の若い身だったマツエさんも、いまや五十歳。高血圧症との闘いを余儀なくされている。

三人の子どもたちは、おかげで立派な人間に成長を遂げつつある。が、これからこそお荷物はマツエさんの肩に一段とその重さを加えてくる。マツエさんがはげしい仕事から解放されて、のびのびと暮らす日はまだまだはるかだ。

依然として、三池縫製工場で働き続けるマツエさん。

縫製工程は縦幅が九間ほどで、横幅が五間ほどのバラック建ての工場に設定されている。

四十五台の動力ミシン（一分間に六千回も回転するとか）が一日じゅううなり声をあげ続け、まわりにはうず高く積みあげられた製品の山また山だ。

天井から四機の扇風機が風を送ってくるとはいえ、製品の谷間で動力ミシンのモーターがびりびりと焼けるこの職場の熱気には歯が立たぬ。そんなところで、マツエさんは、一日平均ほぼ七十五枚ほどのホーフを縫い続ける。

夜――、夕食後テレビを見ながら好きな編みものなどしながら過ごすとき、はじめてホッとするマツエさん。

「このときはじめて、ああ今日も一日が終ったなー、としみじみ思いをかみしめます」

この述懐に、女一人で三人の子どもを育てるのに、ただそれだけのためのように生きてきた過去十三年という歳月への感慨がにじみ出ているではないか。

ともあれ、住居の小さな庭先にも四季の花が咲き続けている。仏へ供える花だけは絶やすまいとのマツエさんの心づくしの花、花、花。ともに、霊よ安らかにと祈らずにはいられない。